

2022年 7月 6日

## 若手研究者海外挑戦プログラム報告書

独立行政法人日本学術振興会 理事長 殿

受付番号 202180155

氏名 古澤 卓也

若手研究者海外挑戦プログラムによる派遣を終了しましたので、下記のとおり報告いたします。  
なお、下記記載の内容については相違ありません。

### 記

1. 派遣先：都市名 バークレー (国名 アメリカ合衆国)
2. 研究課題名（和文）：ジョージアにおける支配政党の成立と崩壊
3. 派遣期間：2021年8月20日～2022年6月9日（294日間）
4. 派遣先機関名・部局名：カリフォルニア大学バークレー校
5. 派遣先機関で従事した研究内容と研究状況（1/2ページ程度を目安に記入すること）

既存研究によれば、権威主義体制における与党は、独裁者が権力を維持するうえで直面している二つの問題に対処する機能を持っている。①権力分有問題。独裁者は下位エリートからの挑戦に対処する必要がある。独裁者は政党組織を通じてエリートに将来のリソース分配を約束することで、彼らの離反を防ぐことができる。②コントロール問題。独裁者は体制外からの脅威（野党、反対派勢力）に対処する必要がある。政党組織を通じて体制支持派を動員することで、独裁者は革命を防ぐことができる。しかし、与党を持った権威主義体制の多くは短命であり、既存研究は上記の機能を果たしている政党はほんの一部である可能性を指摘してきた。政党を建設するために、独裁者は一定のコストやリスクを支払う必要があるため、彼らが無意味な政党建設を行うとは考えられない。それでは、なぜ独裁者は短命な与党を作ってしまうのか？

報告者はカリフォルニア大学バークレー校において、こうした問題にフォーマルモデルで答えることを試みた。具体的には、同校でゲーム理論に関する授業を二つ受講し、現地研究者の指導を得つつ、権威主義与党の成立・存続に関するフォーマルモデルを作成した。このモデルによれば、政治体制の分権性が高く、指導者が反対派に対して寛容なほど、安定した政党が生じやすくなる。逆に体制が集権的で抑圧的な場合、政党が形成されないか、政党が形成されたとしても、短期間でエリートの離脱が生じてしまう。それでも、独裁者にとっては政党を作らないよりはましな結果を得ることができる。

6. 研究成果発表等の見通し及び今後の研究計画の方向性 (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

報告者の最終的な目標は、フォーマルモデルとジョージアでの現地調査を組み合わせ、権威主義与党の成立と持続条件に関する博士論文を執筆することである。ジョージアは1991年に独立して以来、巨大な権威主義与党が成立と崩壊を繰り返しており、報告者のリサーチクエスチョンにとって有益な事例と言える。

報告者は2019年にジョージアで現地調査を行い、ジョージア政治史上二代目の与党である「ジョージア市民連合」の形成から崩壊までの過程を明らかにした。現在、渡航中に作成したモデルを修正し、これをもとにジョージア市民連合の成立と崩壊を説明するペーパーを作成中である。この研究に関し、今年7月8日に開催されるThe Japanese Society for Quantitative Political Scienceで発表する予定である。発表の後、参加者から受けたコメントを元に、雑誌論文として出版することを目標としている。

今後の研究計画の方針は二つある。第一に、ジョージア政治史上三代目の与党「国民運動」と四代目の与党「ジョージアの夢」を中心とした指導者・エリート関係を調査し、この二党の成立と崩壊が上述のモデルで説明できるかを明らかにする。今年8月からジョージアに渡航し、現地調査を行う予定である。

第二に、ジョージアの歴代与党における「権威主義的コントロール問題」を明らかにする必要がある。前述のとおり、既存研究は権威主義与党に対して「権力分有問題」と「権威主義的コントロール問題」の二つに対処することを規定してきたが、今回報告者が作成したモデルは、前者のみしか扱っていない。ジョージア市民連合に関する事例研究も、指導者とエリート間の関係しか扱っていない。そこで、今年行う現地調査では、現与党の有権者動員の実態を調査し、それをもとに、有権者動員に関するモデルを作成する予定である。

7. 本プログラムに採用されたことで得られたこと (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

本プログラムによる直接的かつ最大の恩恵は、往復路の飛行機チケットを含めた補助金である。歴史的な円安・ドル高で現地の物価は高騰しており、本プログラムの援助がなくては長期間のアメリカ滞在は考えられなかった。

カリフォルニア大学バークレー校での滞在によって得られた恩恵は主に三つある。第一に、同校では数理的な手法にたけた政治研究者や学生が多いため、現地で授業を受講することで、報告者に欠けていたスキルを補うことができた。特に政治学分野における応用的なコースを受けることができたのは、貴重な体験だった。同様の授業は日本の大学では稀だからである。この体験が上述したフォーマルモデルにつながった。

第二に、報告者の主要な研究フィールドであるジョージア出身の学生と知り合うことができた。彼らとの交流を通じてジョージア語会話能力を向上させただけでなく、将来の現地調査に向けたコネクションを形成することもできた。カリフォルニア大学バークレー校には世界中から優秀な学生が集まっており、アメリカ以外の地域研究者にとっても優れた留学先であった。

第三に、カリフォルニア大学の学生アカウントを通じて、多くの学術書をダウンロードできた。報告者の日本における所属大学図書館も同様のサービスを行っているが、渡航先大学の方がはるかに多数のコンテンツをダウンロードできた。これは見逃されがちなメリットだが、研究を行う上で大きなアドバンテージとなる。